史跡環境の整備に関する計画的研究(Ⅳ)

……平城宮跡の周辺居住者と利用者の利用実態・利用意識に関する調査研究……

近 藤 公 夫*
中 村 昌 子**
宮 崎 暎 子***
西 洋 子****
山 内 美 恵 子*****

Planning Studies on Arranging Designs of Historic spots Surroundings (Ⅳ)

……Researching studies on Using Habitations and Feelings of Sourrounding
Inhabitants and Users at Heijo Old Palace……

by Kimio KONDOH
Masako NAKAMURA
Eiko NIYAZAKI
Yoko NISHI
Mieko YAMAUCHI

序 言

筆者は昭和40年当時、8世紀に前後する史跡である大阪府枚方市の百済寺遺跡についてその基本計画を担当し、その後、環境整備の半成時に周辺住民に対する調査を試み、住民の評価を始め環境整備に関する問題に知見を得た。

この発表はかかる研究結果を基礎とし、日本列島における古代宮跡の典型であり、その環境整備が問題とされつつある平城宮跡に関し、その計画の緒を求めて試みた調査に関する概説である。

およそかかる史跡の環境整備における問題種々の観点から検討され得る所であるが、これを生活環境の整備として理解する立場で見れば、それは当然に直接それ自体を目的とするか否かに大別されよう。

後者といえども、それを史跡保護という立場で見る場合等いづれ人智の向上に資して Human Happiness を求める意味で生活環境の整備にも当る所であるが、特に史実の解明に資するというこの観点の意義は今や民族文化の反省に関連し注目されつつある。

戦前、日本の上古史が真実を伝えない姿で主張された

*奈良女子大学住居学科

**積水ハウスKK

***愛知県教育委員会

****竹中工務店KK

*****愛媛県教育委員会

事実は別としても、現代世界の文明国といわれるで、その文化の源流が模糊とした状態、しかもそれへの民族の関心が乏しい例、は日本を最とする。

そして日本民族がかかる文化を今に継承せしめた国土を当面する利益のために改造するに急であって、その遺跡の亡失を意に留めない理状は未来に至り「民族の文化源流を論じ、あるべき姿を決すべき機」に過恨ともなるう。

では現実に上古史を求める時、その緒は世紀にその編著が着手された記紀とより古い時代に及ぶ中国文学や古墳宮跡等を含む遺物遺構がそれぞれに注目されよう。

試みに中国の史書を開けば、漢書には日本列島における多数部族国家の分立が示され、ついで1・2世紀の交にはその相当部合を統合した倭王により数百人の使節団が大陸へ渡って漢室から印紙をうけた歴史が記される。

これを記紀に比定すれば大和朝廷以前の太古、推古期より世紀前、遺跡遺物としては博多湾口に発掘された漢委奴国王の金印に裏付けられる時代である。

2世紀から3世紀にかけての実態は後漢書と魏誌により倭国の大乱と新勢力である耶馬台国の抬頭そして匈奴勢力との抗争が物語られるが、記紀の世界としては魏誌に記される東方倭人国（たとえば葛城王朝に比定される大和朝廷等）の発展がこれと暗合しよう。

また近畿の古墳からする世紀銘の遺物の発掘等の事実は当時の古代を知る上に史跡の環境整備がもつ重要性を示唆する。

日本古代を物語る文献はその後4世紀末まで、おそら

くは日本列島の統一王朝が成立するまでの葛城・三輪・春日・河内・和泉・摂津の諸勢力等が発展する時代について欠ける。

そして東海北陸以西を合した日本の姿は4世紀末の高句麗好太王碑の中に半島の任那を中心として新羅・百済に派兵し漢江流域に至って高句麗を脅かした有様に示される。

この数万の大兵を半島に送った王朝はすでに強力な国家としてこの列島を支配し、世紀には晋米梁の中国における支配国家から倭王安東將軍の印紙をうけ、河内に世界最大の古墳を築造するに至る。

しかしこの世紀においても、応神天皇や仁徳天皇という大王の存在すら明確でないのが我々の民族の歴史であり、国史が伝承との混在から脱し得るのは実に世紀に降る。

直接の生活環境整備とはなれて史跡保護のためにするその整備は、このように南北の何れから伝来して如何に古代王朝文化に結実したかも定かならぬ日本文化の黎明を明らかにし、民族精神を省みる緒の保全にはかならない。

これ等から史跡遺構整備がもつ意義を肯定し得る所とすれば、ここでも我が国におけるその実情にふれる問題点が指摘される。

数年前来、文部省が重点整備を構想して来た遺跡をみると、弥生文化にかかわる登呂のほかは7世紀3世紀の朝廷史跡である飛鳥古京・藤原宮・平城宮および難波宮やその地方庁跡に当る多賀城や太宰府を主とする。

そしてその学術上の未解決な問題を考へての結果であろうが、仏教伝来にかかわる世紀やいわゆる倭の五王の時代と思われる5世紀世4紀、さらに耶馬台や倭奴の時代への配慮は乏しいといえよう。

この日本列島に生活する民族が求める豊かな社会とは民族の豊かな人間精神の上に成立するものと考えれば、その基礎たるべき自然環境や文化遺産をより豊かならしめる方向として史跡整備をより広きに及ぼせる配慮は現代の当為にはかならない。

なお、この研究はすでに一部を昭和43年度の本学会関西支部会に口答発表したにもかかわらず、その後は筆者が大学紛争時を通じて学生部課長に併任された学内事情により今まで公表の機会を失した。

併記して研究関係者の諒解を乞いたい。

平城宮跡周辺居住者の調査研究

この調査は昭和43年に宮跡4圓約300m圏の各戸に対する訪問質問調査として試みられ、総数660戸中、460戸余りから1000人強による回答を得た。

回答者の属性は女子が多くて主婦が全数の40%に近

く、年令としては30才未満50才未満同以上の別に4:4:2、学歴では初等中等高等の別3:5:2にである。

回答者の宮跡利用は目的の上で散歩休養見学運動に大別し6:2:2、利用頻度で月2回以上と未満および未利用で、その関心は会話経験の有無により6:4、宮跡の現整備に対する評価は肯定・不明・否定の別により5:3:2の結果となる。

そして宮跡の将来像としては史跡公園・普通公園宅地化等の別に6:3:1、希望施設としては史跡関係施設を中心というものが利用施設を主というものをやや上廻り、発言の多い例には建築復元・児童遊園・発掘展示・運動広場・陳列館が大差なく指摘されて回答の90%近くに及んだ。

この希望施設において史跡施設と公園施設および両者の複合という3型態をわければ各々7/20:8/20:5/20:で全回答を3分する。

これ等から属性と利用実態ないし意識との関係を求めれば、年代に関して10才代は休養・運動が各3/10をこえるほかは休養が40才未満で5/10をこえ同以上では4/10を前後して全利用目的の中に最も多く、利用頻度も月2回以上について10才代は、4/10、40才未満が3/10以上、同以上3/10はに足りない。

また学歴との関係では関心について宮跡に関する会話経験の比率が初等では3/20、中等では4/20、高等では5/20との差異を示し、整備への評価ではそれを認めるものが11/20から12/20へと高学歴ほど増大する。

そして学歴と宮跡の将来像では史跡公園化が9/20、11/20、15/20と学歴に応じて増大、農地宅地化は3/20、2/20、1/20と減少し、他方、希望施設では初等が遊園運動場の4/20以上を最大とするのに対し、中等は古建築と遊園の4/20以上、高等は古建築と発掘地について4/20以上の回答傾向をみせる。

属性についてはなお性別・職業別等による横討も加えたが特色のある結果ないし傾向に乏しいので省略する。

一般に利用実態には年令、同意識には学歴が傾向を左右する要因として注目された。

この知見により特に問題を宮跡の保全意識に限って年令・学歴等の総合属性と宮跡の将来像における史跡公園化の比率や史跡施設のそれを求めると以下の通りである。(表1—2)

前者は史跡公園化を+1に農地宅地化を-1にしての数値を求め、初等学歴では10才代が平均、0.5、40才未満が社会人0.3と非社会人無職・農業)0.2、40才以上が同じく0.4と0.2程度の数値、中等学歴では10才代が平均0.5、40才未満が0.5と0.3、40才以上が0.6と0.4、高等学歴では40才未満が0.7と0.6、40才以上が0.8と0.6で、初等学歴は年令増大と共に意識低下の実状が、おそらく

表1 平城宮跡周辺居住者の史跡公園化意識

事務技術職・学生等			職 業	農 業・無 職		
20才未満	40才未満	40才以上	年令学歴	40才以上	40才未満	20才未満
(0.5)	0.3	0.4	初等学歴	0.2	0.2	(-)
(0.5)	0.5	0.6	中等学歴	0.4	0.3	(-)
-	0.7	0.8	高等学歴	0.6	0.6	-

注意 史跡公園化を+1、普通公園化を0、宅地化等を-1と数量評価して算出した数値を示す。

表2 平城宮跡周辺居住者の希望施設傾向

事務技術職・才未満			職 業	農 業・無 職		
20才未満	40才・	40才以上	年令学歴	40才以上	40才未満	20才未満
(0)	0	0	初等学歴	-0.3	-0.4	(-)
(0.2)	0.1	0.5	中等学歴	0.2	-0.1	(-)
-	0.4	0.6	高等学歴	0.2	0.1	-

注意 史跡施設のみの開発を+1、史跡施設と利用施設の共存を0、利用施設のみの開発を-1と数量評価して算出した数値を示す。

土地所有と関係して見られ、中高等学歴では社会的接触の多い階層にあって意識増大を指摘し得る。

また施設と関連しては同様に史跡施設を+1に利用施設を-1に考え、初等学歴では10才代が0、40才未満が0と、-0.4、40才以上が0と3.3、中等学歴の場合は10才代が0.2、40才未満が0.1と-0.4、才以上が0.5と0.2程度、高等学歴にあっては40才未満が0.4と0.1、40才以上が0.6と0.2という数値を示す。

これは学歴別に施設自体に関する意識を示して初等学歴では生活環境のための直接的な利用施設に重点がかかり、高等学歴では史跡施設に強い注目があり、中等学歴ではその中間として史跡の概念的な理解はあっても若い家庭等では遊園の設定等が優先視されざるを得ない事実が示唆されるようである。

なおこの知見は史跡公園化という意識の内容に公園利用施設の包含が主張される意味でも注目されよう。

これを平城宮跡の将来像と希望施設の関連で直接に分析すると、史跡施設と利用施設の上述比が史跡公園化の回答にあって0.5、公園緑地化では-0.4、また農地宅地化の場合に以上であり、観点をかえると全回答の過半に当る史跡公園化の主張もその半数近くは何年かの利用施設の開発を含み、史跡施設のみを強調するものは全数の3/10程度にすぎない。

このほか調査内容間の問題で注目される所には利用目的と利用頻度の関係で、運動目的の回答は利用頻度が最大、見学目的は最小、散歩休養目的はその中間でその度数比は見学を基準に散歩のそれは1.1倍、運動のそれは

倍程度に及ぶこと、目的と現状評価の関係では運動が最大で0.6、見学が、0.5散歩が0.4そして未訪が0.1という傾向、を前述に準じたにより示す。

また目的と希望施設の関係では史跡施設と利用施設に前述の比重を与えて運動0.1、散歩0.1、見学0.3、これは史跡公園希望に運動が9/20、散歩12/20、見学13/20という数値とも暗合する。

つぎに会話頻度からする関心の如何と評価の関連では頻度の高いもので0.5、頻度の低いもので0.3という差異を前述に準じた+1から求め得、その評価別による将来像としては肯定で史跡公園・普通公園農地宅地化が6:3:1、否定で5:3:2が答えられて問題の所在を示唆する。

結論的にこれ等の事から回答のうち現整備を肯定して史跡公園化を主張するものは約7/20、否定ないし不明として史跡公園化をいうものは約4/20、普通公園化は各4/20と3/20、農地宅地化は後者を主として2/20を算すると、評価と希望の傾向が総括されよう。

平城宮跡利用者の調査研究

この調査は昭和42年夏秋に宮跡利用者に対し面接調査として試みられ、無作為抽出により700名強からの回答が得られた。

その属性は男女2:3程度、職業は学生が、7/20事務専門管理9/20、自営と無職各2/20で、年令は30才未満、同以上の別で4:6と若い世代が多く、学歴は初等・中等・高等の別に2:4:4、居住圏は15分圏、60分帯、150分帯と圏外の別に2:3:3:2をなしている。

その宮跡利用は目的について休養・見学・運動に大別し3:6:1、その印象分野は整備緑地・周辺景観・発掘地点・雑に大別して3:3:2:2、将来像は史跡整備・普通公園・雑の別に8:1:1、希望施設としては史跡関係施設を中心にというものと否とが、8:2、施設に関して発言の多いのは建築復元の4/20、休養園地ないし児童遊園の7/20、運動広場の3/20等であり、この希望施設で史跡施設と公園施設および両者の複合という3型態は各々9/20:4/20:7/20として全回答を大別し得る。

これ等から属性と利用実態ないし意識との関係を求めれば、年代別利用目的として10才代は見学等・休養・運動が各3/10、40才未満は見学等6/10と休養3/10、40才以上は見学8/10と休養1/10を示す。

またこれと居住圏の分布を関連させてみると宿泊圏の分布は10才代で1/10、40才未満が、2/10同以上が4/10と高年令層の利用に宿泊旅行による利用が著しい。

他方、総利用についての距離別構成を、調査20日間中の休日300人平均・平日100人平均という利用者数による年5万人程度の、全数に配分すると15分圏約1万人以

下、60分帯1.5万人弱、150分帯1.5万人強、宿泊圏1万人程度という推測が結論される。

いま各圏帯の人口を0.5万人、20万人、0.1億人、1億人と推定すればその誘致率は各々200%、6%、0.2%、0.01%となり、時間距離の増大との函数関係は各々2.5乗、3乗強、4乗ないし5乗に反比例することを示す。

つぎに職業と利用意識を関連させると、見学では教職の約80%が当り、運動では生徒と自営職の20%強が相当して階層的な特性を示し、普通公園化という希望に関しては生徒・自営・無職に平均を上廻る数値が見られる。

さらに学歴と利用意識の関連については目的で見学・休養等運動の別に初等学歴が、3:3:4中等が5:3:2、高等が7:2:1、印象は整備緑地、周辺景観・発掘地点、雑の別に初等学歴が4:3:1:2、中等が3:3:2:2、高等がという変化を示す。

そして宮跡の将来像については史公園化が12/20、16/20、17/20と学歴に応じて増大（ただし古建築復元を中心にせよと主張するものは4/20、5/20、3/20と不定）し、宅地化等の主張は1/20で学歴に関係を示さない。

この知見から問題を宮跡の保全意識に限り年齢・学歴の総合属性と宮跡将来像の史跡公園化提案率を求めると、史跡公園化を+1に園地定を-1にして初等学歴では20才未満が60分圏内0.4、圏外0.5、40才未満が圏内0.5、圏外、0.8、40才以上が圏外、0.7中等学歴では20

才未満が圏内0.3、圏外0.7、40才未満が圏内0.7、圏外0.8、40才以上が圏内0.7、0.9圏外、高等学歴では40才未満が圏内0.7、圏外0.9、40才以上が圏内0.7、圏外0.9となり、学歴と年齢と同時に居住分布の影響が強く見られる。（表3）

また同様に史跡施設の問題をみると史跡施設を+1に利用施設を-1にして、初等学歴では20才未満が圏内、-0.4、圏外-0.1、40才未満が圏内-0.3、圏外0.4、40才以上が圏外0であり、中等学歴は20才未満が圏内-0.3、圏外0.5、40才未満が圏内0.1、圏外4、40才以上が圏内外共0.6、高等学歴では40才未満が圏内0.3、圏外0、5、40才以上が圏内0.6、圏外0.8という数値を与える。（表4）

この分布圏の影響が宮跡意識の抽象的な問題以上に具体的な希望で強く見られることは周辺の居住者がこの空間を利用する上での傾向を現実的に示す所といえよう。

この利用上の問題意識はさらに15分圏という範囲でみると20才未満が-0.4、30才未満が-0.2、40才未満が、0、40才以上が0.7となって、宮跡が日常生活の生活機能空間として住民に如何に理解されているかを示す。

そしてこの知見は史跡公園の施設として構想される利用施設の意味に関し示唆する所とも思われ、宮跡の将来像に関して史跡公園を主張する層の上記数値は0.3ないし4.0であるのに、利用機能をもつて公園を主張する層のそれは-0.5と求められ、利用施設の否定は全回答の1/20、消極的態度のそれでも7/20にすぎない。

このほか調査内容間の分析を試みると上記属性と利用目的の関係について15分圏では20才未満で見学・休養・運動の別に1:5:4、それ以上が、分帯では20才未満で2:4:4、40才未満が、3:5:2、同以上が8:2:0、150分帯では20才未満が6:3:1、それ以上が8:2:0、圏外では全回答が9:1:0、同属性と印象の関係では15分圏で初等教育層で緑地・眺望・発掘・雑の別に4:3:1:2中等以上が4:3:2:1、60分帯で初等が4:4:1:1、中等以上が4:3:2:1、150分帯で初等が4:1:3:2中等以上が3:3:2:2、圏外では2:3:4:1平均となり、高教育層に発掘現場への注目が強い事実など、が遠隔地居住に見学目的の多い現象と共に強調される。

考察と問題提起

さきに史跡環境の保全が直接間接の意味で生活環境の整備に資する所以をあげたが、ここでは宮跡周辺居住者が期待する休養機能空間を解明することにより、それをひとつの緒として宮跡整備の方向に提案を試みたい。

居住者と利用者の意識比較は付表に試みた所であるが、希望施設の問題をみると周辺居住者は20才未満の階層において利用施設の導入が多数を占め、史跡整備の強

表3 平城宮跡利用者の史跡公園化意識

交通時間60分圏内			居住分布			圏外		
20才未満	40才未満	40才以上	年齢学歴	40才以上	40才未満	20才未満		
0.4	0.5	(-)	初等学歴	0.7	0.8	-0.5		
0.3	0.7	0.7	中等学歴	0.9	0.8	0.7		
(-)	0.7	0.7	高等学歴	0.9	0.9	(-)		

注意 史跡公園化を+1、普通公園化を0、宅地化等を-1と数量評価して算出した数値を示す。

表1と比較し20才未満では低く、他は高い。

表4 平城宮跡利用者の希望施設傾

交通時間60分圏内			住居分布			圏外		
20才未満	40才未満	40才以上	年齢学歴	40才以上	40才未満	20才未満		
-0.4	-0.3	(-)	初等学歴	0.0	0.4	-0.1		
-0.3	0.1	0.6	中等学歴	0.6	0.4	0.5		
(-)	0.3	0.6	高等学歴	0.8	0.5	(-)		

注意 史跡施設のための開発を+1、諸施設の共存を0、利用施設のための開発を-1と数量評価して算出した数値を示す。

表2と比較して20才未満は0.4程度低く、40才未満は等しく、同以上はやや高い。

調は中年層以上のみに著しい。

また史跡整備以外の施設導入を拒否する主張を求めてもその数は比較的乏しく、この調査で得られた回答の大多数は史跡整備と利用施設導入の調和を適当する。

かかる知見における利用施設とは展示館・展望台・遊園・運動場・文化会館レストハウス・パーキング等であるが、現実には平城宮跡にあつてはすでに北西隅に当り文化庁平城発掘事務所が建設されており、展示施設等も併置されている現状であるから、上記の建築施設については現建築の拡大整備を中心とする横討が妥当であろう。

また運動場等の施設については正規の競技を考えずに広面積の排水がよい草生地を、地下遺構の破壊がないよう設置すること等で解決し、児童遊園も単に遊戯施設を問題とせずには広大な空間自体を自由遊戯の場にあてる等の想念で、その史跡環境との両立が求められ得よう。

これ等の計画原理は史跡整備を強調する平城宮跡整備の本質的な主張と共存し得る可能性が比較的に高いものと思われる。

なおこれに関連して城宮古建築の復元という問題があり、利用者の2/10程度に主張されているがその実際については建築史の専門家による横討が先行すべきであろう。

従来、平城宮跡の整備については若干の構想計画の提案があり、昭和40年以降に関しても、故森氏（奈良市公園課長）、西山氏（京大建築教授）、文化財研究所有志等による案、さらに筆者の構想等がある。

各案の先駆的な位置を占めた森氏の案を見るとその形状において都市公園の諸施設の中に宮跡の遺構を配置する姿勢をとり、4園には奈良市民の利用を主とする諸文化施設や園地の導入が図られる。

西山教授の構想はその研究集団が試みた奈良計画の一部としての提案であるが、朱雀大路の正面に当る内裏建築を復元し、他はなるべく人工の入らない緑地として自然状態に近く維持する方針と考えられる。

文化財研究所有志を中心とする案は両者を総合し、宮跡の将来構想を再横討したもので、中心部を部分的に建築復元する他は判明した限りにおいて遺構を緑化整備し、その周囲は将来の調査を考えて公園化する方針をもつ。

終りに筆者の案は全宮跡の発掘が完成した時点想定しての提案であるが、予想される宮跡各区の敷地とその建築に応じて樹木・芝生・野草・石敷・土地・砂地等の各種地表修景を施すことを基礎に、その調査研究や建築復元さらには運動利用に至る休養の場を共存させる構想を示す。

宮跡の全地点にこの機能や空間型態における諸要素を

共存させる方針は他の案に対して新しい発想であり、またこの研究から得られた結論にかかわる所としてここに強調したい。

それは宮跡の遺跡としての考古学的ないし史的意義がなお不明な現在において、即ちその保存と開発の空間分別に関する判断の困難がある以上、ひとつの考え方と理解され得るであろう。

要 約

この研究は史跡環境の整備に関してその生活の場に対する間接的貢献、特に文献の乏しい日本民族の古代を知る上での重要な問題として漢倭奴国王の金印をはじめ大古墳に至る遺物遺構の存在等、に注目し、その方向を模索する研究の一端である。

この小論の内容は平城宮跡を対象にその周辺居住者利用者の合計1,800名弱の質問調査を試みた結果から史跡環境整備への示唆を求めたもので、特に各対象の意識に注目すると以下の通りである。

宮跡約100ha（現在さらに20haを買収中）の将来像、導入施設の提案に関して、居住者では史跡公園化がほぼ3/4を占めるがその半数は遊戯や休養の利用施設導入をその前提とし、その階層別特性としては社会的な接触の多い中年層で学歴の高い場合ほど上述の意識が高く、宮跡を純粹の史跡保護地に近く考える。

これに対して利用者の場合は4%を上廻る史跡公園化の主張があるが、利用施設導入の意見はその4%に達して利用便益施設の導入など居住者のそれを上廻り、階層別には遠隔地からの中年層で学歴の高い場合ほど純粹な史跡保護を提案する。

いずれにせよ、この居住者、利用者の過半数が利用施設の導入を肯定している事実は、利用と保護の両立共存がなければ保護は成立し難い危険性を示唆するといえよう。

終りになお問題はこの8世紀の古京平城からさかのぼって、7世紀の藤原飛鳥にせよ、さらに5世紀に前後する畿内ほかの古代の文化中心にせよ、またそれ以外の出雲や吉備、古くは紀元前後に当る九州の文化遺跡にせよ、それぞれに共通して考慮すべきことが主張される。

図一 故奈良市公園課長「森一雄氏」による計画（昭和39年）

利用施設の導入と宮跡展示の両者を肯定する提案。

宮跡4周に大巾員の植樹帯を設け、宮跡中央は旧態に準ずる格子状通路を開発し、第1次内裏¹⁾の発掘跡展示と第2次内裏²⁾の低木園化により宮跡整備をはかる。

宮跡周辺部は1条通以北を記念碑園³⁾を中心とする公園⁴⁾、近鉄以南を動植物園⁵⁾とし、その間の内裏東方は

图—1

图—2

文化会館敷地⁶⁾、西方は博物館⁷⁾と民家村⁸⁾に整備する。

図一 2 京都大学教授「西山卯三氏」ほか奈良計画グループによる提案(昭和40年)

「奈良計画1965」における宮跡の復元保全を中心とする案。

全域を旧平城宮の地割りにしたがって園地化、つぎのもの、建築復元を提案する。

第1次内裏¹⁾朱雀門²⁾4囲の各宮門³⁾宮壁⁴⁾

なお第2次内裏⁵⁾は園地としてその遺構が明らかとなるように考え、他は芝生の園地⁶⁾を広面積に設定する。

図一 3 奈良文化財研究所の有志による計画(昭和42年)

同研究所で作製された復元模型の考証案にともなう案。

第1次内裏¹⁾、朱雀門²⁾等を建築復元し、以東を植栽で遺跡整備³⁾、以西は園地化⁴⁾して旧秋篠川跡を池庭⁵⁾に改修、この園地には遺跡の発掘状況を展示、保全する施設⁶⁾を設ける。

図一 4 奈良女子大学と文化財研究所の有志の合同計画(昭和43年)

東宮の発掘結果をいれて立案され、建築跡の展示に重点をおく案。平城宮の全遺構は確認、未確認の別により建築復元¹⁾(1次内裏、朱雀門等)と植栽²⁾や諸舗装³⁾等に発掘結果をおって整備し、復元建築内に出土品や発掘状態の展示を試みる。

近鉄鉄道路線や一条通等の道路を将来は宮跡外に移

し、できれば東宮南方の域外地⁴⁾を買収し国道24号からする利用基地にあてる。

Summary

This study intends to research principles of environmental design in historic spots those are regarded important on historic sciences in old Japan, especially before Ⅷth century.

Following facts are resulted from interview surveys of surrounding inhabitants and visitors of Heijo Old Palace where Yamato government was in Ⅷth century.

From more 1,000 inhabitants' survey, historic park is agreed by three quarters of them, but almost same population insists to introduce recreational facilities into there; and more 700 users show same tendency in above problem.

Preservation of Heijo is pointed by classes of high class education, of adult and of people who have social job or visit here with long distant tour.

As results, it is judged that designs in Heijo should keep two elements of historic preservation and recreational arrangement, for the purpose of construction and maintenance of Heijo; otherwise they may fail to preserve Heijo with concerning human habitation.

Above two elements would be studied with attached plans by Nara city Government, Kyoto University, Nara Cultural Treasure Institute and the writer,